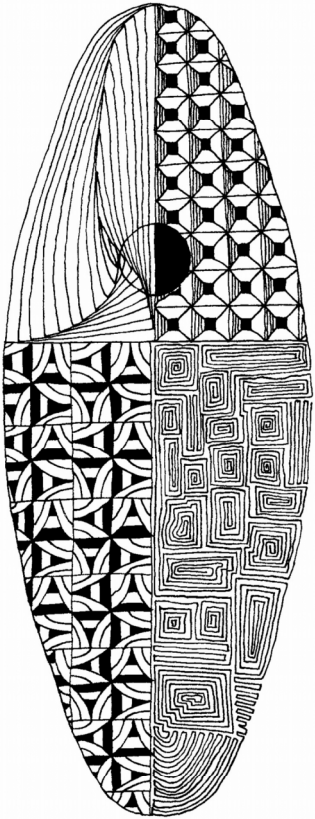
Tales of MANDALA

夏がはじまりおわるころ



白橋　升

夏がはじまりおわるころ

Tales of MANDALA

白橋　升

遊星出版

表紙・挿絵　白橋　升

目次

一　初動　5
二　助言　11
三　参入　14
四　伝令　18
五　邂逅　20
六　儀式　27
七　第一の夢　34
八　第二の夢　42
九　伝授　51
十　探求　60
十一　海神　67
十二　第三の夢　70
十三　予兆　88
十四　履行　93
十五　帰郷　107

一　初動

そこは港町だった。
明るい日差しのもと、大勢の人たちが働いている。
青く霞んだ水平線があり、漁船がもやわれていた白い岸壁があり、倉庫があった。
倉庫の日陰にある木箱に腰かけて、水平線の向こうを眺めている青年がいた。
名は海（ウミ）といった。
ウミは海へ出たことなど一度もなかった。
漁師や港の仕事をしているわけでもない。
ただ一日、海を眺めているだけだった。
魚や、魚の加工品を運ぶ車や、漁師たちが忙しく行ったり来たりする。
ウミの目は人々を見透かして水平線の向こうを見つめているだけだった。
「きみはなにをしているの」
小さな男の子があらわれた。
黙っていると男の子は同じことをきいた。
「なにしてるの」

目が大きく、青と白のボーダーのTシャツを着て、赤い半ズボンをはいている。
髪はちぢれていて茶色い。
自分が子供だった頃に似ているナ、とウミは思った。
なおもウミが黙っていると、男の子はとがめるように言った。
「大人は働かなきゃダメなんだよ」
「自分だって働いてないだろ」
「ぼく子供だもん」
「オレだって大人じゃない」
ウミは木箱から立ち上がる。
「秘密の場所があるんだ。行かない？」
同世代の連中は仕事したり勉強したりしている。
ウミはそのどちらもやる気はなかった。
ため息をついて男の子を見た。
「名前は」
「サンゴ」
「女みたいな名前だな」
「ねえ、行くの？」

男の子は期待のこもった目つきでウミを見上げている。
「いいけど……」
どうせヒマだし。
「やった！」
サンゴはウミの手をひっぱった。
「なれなれしくするな」
ちょこまかウミの前を歩いて行くサンゴ。
港の大人たちは皆自分の仕事に忙しく、子供と青年には目もくれない。
サンゴを見ながら、自分がサンゴくらいの頃のことを思い出していた。
すでに母親はいなかった。
ウミには母の思い出がない。
父親に写真を見せてもらったことがあるが、ただの知らない女性だった。
父親は多くを語らない人で、漁師だか船乗りだか、一度海へ出ると半年から一年は帰って来ない。その間ウミは父親が置いていったお金をやりくりして、独りで暮らしていた。
幼い頃は親類にあずけられていたが、そこでの思い出もほとんどなく、従兄弟（いとこ）がいたはずだが、誰かと一緒に遊んだ記憶もない。
ただひとつはっきりしていてよく覚えているのは、海（ウミ）という名は母親がつけたのだと、酒に

酔った父親が教えてくれたことだけだった。
港のはずれまでやってきた。
そこから先は岩場だ。
ウミは岩場の先の水平線に目をやり、立ち止まる。
オレには時間がないんだ。
家にいていいのは成人するまでだ、と父親に言い渡されていた。
――成人を過ぎたら家を出て自分で暮らしていけ。オレがお前の面倒をみられるのはそこまでだ――
知らないガキと遊んでいるヒマはない。
サンゴが少し先の岩の上からふりかえる。
「こわいの？」
「え」
「こわいんでしょ」
そうかもしれない。
くりかえし見る夢がある。
――水平線が一気に高くなって、海全体が自分に向かって押し寄せてくる。そのまま海に飲み込まれて、息がつまって目を覚ます――

何度見ても気持ちのいい夢ではなかった。
サンゴが言った。
「すぐそこなんだよ」
ウミを安心させようとしているのだろうか。
「秘密だからって、どこか遠くにあるわけじゃないんだ」
港の外れを岩場づたいに歩く。
天気はよく、海は静かだった。
スニーカーと短パン、Tシャツ姿のウミはよろけながらサンゴの後をついて行く。
港の喧噪が聞こえなくなってしまうほど奥まった所にたどりついた。
そこには小さな洞穴(ほらあな)があり、洞穴のまわりは小さな入り江になっていた。
もう長いことこの港町に住んでいるが、知らない場所だった。
洞穴の前には小さな砂浜があった。
民家の庭ほどのスペースだ。
静かな空間だった。
サンゴが言った。
「夜にまた来れるかい」
学校には行ってない。

会社にも行ってない。
ことわる理由はない。
それでも。
夏空を見上げて考えた。
こいつは誰なんだ。
なんでオレをこんな所に連れてくるんだ。
ただ言われたままにするというのもシャクだ。
「いいよ、来るよ。だけど気が変わるかもしれない。時間も約束できない」
ウミはサンゴの大きな目をじっと見た。
男か？女か？
「それでよきゃ」
「いいよ。ありがとう」

夏がはじまりおわるころ

Tales of MANDALA

2019年11月20日　初版

奥　付

発行　遊星出版

著者　白橋　升
URL　http://athome.la.coocan.jp/ 「遊星出版」
E-Mail　landfacer@yahoo.co.jp

イラスト　白橋　升
URL　同上
E-Mail　同上

Special Thanks
　ここまで読んでくださったすべての方々

印刷　製本直送.com（株式会社ブックフロント）

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
(http://tokimi.sylphid.jp/)

遊星出版既刊

白橋　升

夏がはじまりおわるころ

ウミはその名前と裏腹に海に出たことなど一度もなかった。日がな一日、ただ海を眺めているだけ。そんな青年の前に、見ず知らずの、ひとりの子供が現れる……ちょっと不思議なひと夏のお話。

白橋　升

夜の石は天に昇り空ゆく星に会えた

あなたのようなぼく、ぼくのようなあなた。ぼくとあなたでこの宇宙ができているのだとすれば、ぼくとあなた。それがすべて。旅している人に。旅が好きな人に。これから旅をしようとしている人に。

白橋　升

大きな樫の樹の下に

均衡世界シリーズ

カタドウリという国に住む、ホノワール・オモタ氏はちょっと疲れたサラリーマン。ある日偶然見つけた占いの本に導かれるようにして、カタドウリとは、似て非なる国に迷いこんでしまう。はたしてそこは……

遊星出版既刊

カタ中央大学　ユウキ・シンダイ大教授

ほんとうのこと、または、でたらめの書

均衡世界シリーズ

「大きな樫の樹の下に」に登場した占いの本を忠実に再現。ホノワール・オモタ氏が手にした不思議な本が、あなたの手にも。シンダイ大教授の懇切丁寧な説明付きです。物語の続きはぜひあなたの手で！

白橋　升

ミネリの銘板

均衡世界シリーズ

「大きな樫の樹の下に」続編登場！舞台はオモタ氏がカタドウリへと帰った一〇年後のカタ。古書店を手伝うミオは偶然出会った年上の女に、面倒にまきこまれそうなところを救われる。女は実は「魔女」で……

以下続刊

出遊
版星